

神島二郎「転換期を読む」再考

石 積 勝

要 約：

『神島二郎「政治元理表」の世界』（2021年3月神奈川大学国際経営研究所、Project Paper No.54）の続編。

本研究ノート序章および第一章では、神島が処女作『近代日本の精神構造』（1961年、岩波）執筆にあたり、どのような問題意識で臨んだか、また、その問題意識がどのように「政治元理表」に反映されているかについて論ずる。第二章では、「政治元理表」に結晶している神島の政治学的認識枠組みにも触れながら、神島の時事的評論「転換期を読む」をテキストに、筆者（石積）なりに日本の現状についての考察を行う。

キーワード：神島二郎、政治元理表、『近代日本の精神構造』

目 次

はじめに

序 章——神島政治学の性格と政治元理表

第一章 処女作『近代日本の精神構造』に見る二つの特徴

1-1 神島政治学と元理表を貫く〈重層性〉

1-2 神島の激しい〈執念〉

第二章 神島二郎「転換期を読む」再考

2-1 「政府と国民の距離が遠い」（東京新聞 1994年1月18日）

2-2 「混迷に対処する道」（東京新聞 1994年1月2日）

2-3 「エリートの大衆回帰を」（東京新聞1994年1月27日）

おわりに

はじめに

私はここ数年、政治学者神島二郎（1998年没）の晩年の試み、つまり政治学のパラダイムシフトを企図した未完の「政治元理表」について考察している。その直近の考察として

は『神島二郎「政治元理表」の世界』（Project Paper No.54 国際経営研究所 IIBM 全103ページ、2021年3月）がある。今回のこの研究ノートは、その直近の考察の延長線上に位置づけられている。今回の論考では、上記Project Paper No.54で検討した「政治元理表」を横

目で睨みながら、しかし必ずしも「政治元理表」に拘泥せずに、神島の東京新聞への連続6回にわたる寄稿文「転換期を読む」（1994年1月）の中から3回分を選んで、それらをテキストとして、私なりに、現在進行中の日本の状況を考えてみたい。それを本稿 第二章で行う。

その前に、序章を設定し、そこでは「神島政治学の性格と政治元理表」の関係、そしてその「元理表」はどのように使われるべきか、について触れておきたい。この序章は、前掲Project Paper No.54の、いわば補足となる。

第一章では、神島政治学の原点となった処女作『近代日本の精神構造』のふたつの特徴について論じる。今回、私自身がこの研究ノートを書き進める中であらためて感じたふたつの特徴である。

第二章 神島二郎「転換期を読む」再考は、前述のように神島の東京新聞寄稿文の再掲とともに、その延長線上での私のコメントとなる。

序章——神島政治学の性格と政治元理表

神島の日本社会に対する論考は多岐にわたり、第一章 1-1として後述するように、その考察は〈重層的〉である。つまり神島は政治学あるいは社会科学の〈認識枠組み〉と、現実に見れている〈現象の把握〉との間での〈往復運動〉を、繰り返そうと試みる。同時に、そのプロセスの中から、より普遍妥当性のある新たな〈認識枠組み〉を開拓しようとする。その新たな〈認識枠組み〉の現時点での到達点が「政治元理表」というわけだが、この「政治元理表」をどのように見るべきか、使うべきか、についての極めて的確な指摘が前田康博氏（千葉大名誉教授）によってなされている。その指摘は『回想神島二郎』の中の同氏によるエッセイ寄稿文の中で行われており、またそれはすでに前出『神島二郎「政

治元理表」の世界』の中で筆者（石積）が紹介しているのだが、重要な指摘だと考えるので、あえてもう一度、下記に示しておこう。

「（神島が政治元理表に帰結させた）〈政治的まとめ〉諸原理一覧表（政治元理表）は、これを完成された分類原理としてよりは、具体的接近にあたっての索出原理として、その方法的仮説性において継承するとき、豊かな発展可能性を——方法的に——孕んでいます。

先生の〈方法における〉処女作への回帰を、方法的に継承するには、先生の知的遺産をあくまでも方法的に開かれた相で照らし出さなければなりません。」（前田康博氏（千葉大名誉教授）「処女作へト回帰スル人」『回想神島二郎』神島二郎先生追悼書刊行会 1999年5月 PP163-168より抜粋、引用文括弧内及び下線は筆者・石積による挿入）

上記前田康博氏の引用文（下線部）でいう神島の処女作とは、1961年に発表された『近代日本の精神構造』（岩波書店）のことである。この400ページにわたる小さな活字に埋め尽くされた密度濃厚な作品は、多方面に大きな衝撃を与えたが、私が述べておきたいのは、この作品についての、その具体的な中身のことはなく、そこで示した神島の〈根本姿勢〉についてである。

前田氏が回帰という言葉で示唆しているように、神島はこの処女作を出発点にしながら様々な形で自らの、その時点での到達点を、その都度、発表してきたが、最終的にそうした考察の、その集大成として元理表に回帰したのである。元理表には処女作にあらわれていた〈根本姿勢〉がやはり明確に集約されているので、その意味で回帰であるのである。したがって、まずは、神島政治学のそもそもの出発点になった処女作『近代日本の精神構造』に見える〈根本姿勢〉、つまり、処女作

のふたつの特徴について、第一章として、以下に述べておきたい。

第一章 処女作『近代日本の精神構造』 に見る二つの特徴

神島の処女作『近代日本の精神構造』には特徴がふたつあると思う。ひとつはその著作全体を貫く〈重層性〉であり、もうひとつは神島がその著作にこめた〈執念〉のようなものである。以下、1-1としてその〈重層性〉について述べ、1-2として神島の〈執念〉について述べようと思う。

1-1 神島政治学と元理表を貫く〈重層性〉

著作『近代日本の精神構造』の特徴のひとつは、じつに624項目に及ぶ註釈の存在である。それら註は時には古今東西の理論に関するものであり、時には一見些末に見える習俗の紹介である。本文での根幹的主張とそれを裏付ける事実の提示、脚註での関連の資料提示とさらなる解釈や主張、それらが渾然一体になってこの著書は書き進められている。その〈重層性〉のせいで、この処女作『近代日本の精神構造』はかなり読みにくいものにもなっている。

しかし、この〈重層性〉は、神島にとっては決して譲れないものだったといっていよい。また私（石積）がもっとも共感するところでもある。この〈重層性〉はすでに処女作『近代日本の精神構造』のひとつの、いや最大の特徴だった。森羅万象の政治・社会現象について、知的ディレッタンティズムからもっとも遠い態度で、きれいに分けななどできそうもない混沌とした現象に向かい合い、もがいて、もがいて格闘しながら、つまり自分自身の直感と価値判断とコミットメントを徹底的に引き受けながら、しかし一方で普遍的理論構築に向かおうとする決意が、この著書全般に流れている。

この濃密な真剣勝負の400ページの研究書

が、なぜ広く、いわゆる〈学会〉を越えて読まれたかというカギもこの〈重層性〉にあったのだろう。たとえば丸山眞男の切れ味鋭い日本分析に触れ「目から鱗」の体験をした学生たちは、あまりの、その丸山の切れ味に、逆にふとした違和感を抱いていたのかもしれない。「なぜか解らないけれども、丸山的西洋政治学のエッセンスを背景にした日本分析に欠落している部分が、神島にありそうな気がする」というようなことを語り合っていたのではないだろうか。60年代中盤以降に吹き荒れた学生反乱のなかで、「近代啓蒙主義への懐疑」「自己批判」「東大解体」「造反有理」などというビビッドなスローガンとともに、神島のこの処女作は「西洋近代の認識枠組み」というタガがはめられた言説を超えるかもしれない、何かがあるのではないかと多くの学生の間で語られていたのではないだろうか。そうした読者にとって神島の著作の第一の魅力は、現実に対する〈アプローチの重層性〉であり、その〈言説の重層性〉ではなかったかと思う。そしてその〈重層性〉は神島が最後に残した「政治元理表」そのものの性格でもある。未完成のまま残された「政治元理表」は神島政治学の晩年の集大成であるが、それは神島の処女作『近代日本の精神構造』で示した根本的な問題意識と考察の方法のありかたの延長線上のものであったと思う。

神島は「政治元理表」の各マス目の用語の選択に徹底的にこだわったが、時間と空間を限定せずに、あらゆる政治現象をすくい上げようと、しかもあの一枚の表で表現しようとするのだから、それは想像を絶するくらいに大変な作業であっただろう。一見、平面的に見える元理表の各ターミノロジーの背後には古今東西・森羅万象の政治現象がそれぞれ〈重層的〉に控えているのである。この点こそが前田康博氏の指摘する「豊かな発展可能性」のことでもある。

1-2 神島の激しい〈執念〉

処女作『近代日本の精神構造』の特徴のうちひとつは、研究書としてはまったく異例の30ページにも渡る「あとがき」である。この「あとがき」には1936年2・26事件前後からの、激動の時代の中での神島自身の精神と存在の葛藤が赤裸々に書き込まれている。1943年、学徒出陣に先だつての一般入営者としての陸軍入隊。マニラ、バギオ、北バンバン、キアングと転戦し、マニラでの3ヵ月に及ぶ捕虜収容所での生活でなにを思ったか。敗戦から4ヶ月、帰国後に見た、戦争責任者たちの身の振り方や変わり身の早さ。一方で散ってしまった同胞たちへの痛恨。その中で神島は悶絶する。そして天皇制〈体制〉そのものの無倫理性への憤激とその構造解明の中で、「近代日本の精神構造」の検討が本格的に始まる。入隊前からはじまり、捕虜生活を終えて帰国しての神島の生活と思索のあらまし、この「あとがき」の中心となっている。

その「あとがき」は30ページに渡ったが、その冒頭10数行は次のようなものであった。

「私は、ちょうど聖地巡礼でもあるかのように、思想上のメッカを遍歴することが流行る時代に生まれ、こういう遍歴を誇示しながら、時の流れとともにおしうつてあやしまぬ時代に生き、私はこういう人々の「思想」そのものにいいしれぬ憤りと疑いを感じずにはいられなかった。私にとっては、思想とその研究とは、自己の人間的な全存在の重みをかけたものでなければならなかったから、私の思想史研究史は同時に私自身の精神史とふかくかわりあっている。したがって、そこには、はなやかな遍歴などあろうはずもなく、そのかわりに、そこには、やむことをえずしておし移った道すじがある。かえりみておのが愚かさをひとり笑わずにはいらぬことはあっても、じつはそれ以上にもそれ以外にもなしえなかつ

たことを私は知っている。だから、私の研究の成果が貧しければ、それはまた、私自身の全生活の幼稚さの所産なのである。」(『近代日本の精神構造』PP347)(下線は石積加筆)

上記引用文一行目の思想上のメッカを遍歴する時代とは、なにをいっているのだろう。もちろん神島の青春時代のことである。政治的には大正デモクラシーを経たりベラリズムの時代から、急速に軍国主義へ傾斜する時代のことである。

神島は1939年旧制一高に入学するが、この頃はまだ「デ(デカルト)カン(カント)ショ(ショーペンハウアー)、デカンショで半年暮らすアヨイヨイ、あとの半年寝て暮らす、ヨーオイヨーオイ、デッカンショ」が全国の旧制高校で歌われ、高踏的思想遍歴が若者たちに共有されていたのだろう。時代は確かにそうだったが、神島の現実、特に自身の家庭の貧しさの現実——貧乏の中で2人の弟妹が死んだ——は、そうした上滑りな高踏性を許すはずもなく、それに加えて形而上学的な言説などとはまったく無縁な田舎出の一兵卒の兵士とともに戦争の最前列でサバイバルの日々を過ごした彼にとって「思想とその研究とは、自己の人間的な全存在の重みをかけたものでなければならなかった。」そのような神島政治学には自分の過去や、戦友たちの死の、あまりにも生々しい記憶を背景にした、いわば〈執念〉がその出発点にある。主体性などという生やさしい表現では追いつかない〈執念〉である。

じつは上記引用文で私がのべた神島の激しい〈執念〉は、書かれたものから感じられるだけではなかった。毎月一回、10年以上にわたる御自宅での研究会、そして時折の会食などでも、神島先生のその〈執念〉は常にそこにあり、それは私たちに緊張を強いるものであったが、同時に前向きな力を与えるものであった。私(石積)は「近代西洋政治学

の罫」(『回想神島二郎』所収)の中で次のように述べた。

「政治学の徒としての神島のすべては戦場から帰ってからの激しい悶絶の中から生まれている。神島の政治学は、散ってしまった無数の戦友たちの、血まみれになって死んでいった無数の異国の人々の、その魂をなんとかしてでも浮かばせようとする激しい執念に支えられていた。——中略——(神島の政治学は)近代の言説の核心的な位置を占めた武力と支配の論理を徹底的に相対化し、根源的に突き崩そうとする近代の超克であった。私は神島先生を回想するが、先生は「そんなことより勇気を出して前に進みなさい」とむこうから仰っている気がする。」(『回想神島二郎』神島二郎先生追悼書刊行会 1999年5月 PP260)

さて神島政治学の〈重層性〉と、その〈重層性〉を支える原動力になっている神島自身の〈激しい執念〉についてはここまでしておこう。本研究ノート〈まえがき〉でのべたように、次の第二章では、神島の1994年発表の新聞寄稿文を、今日ただ今(2021年8月)の視点で私なりに論じたい。

なおこの第二章は政治元理表を意識しての現代日本考察の試みでもある。

前掲Project Paper No.54では、その第4章『元理表でアメリカを考える』の中でCASE1として「総体としてのアメリカ」を論じ、CASE2として「2020年米大統領選と最近の中国問題」を論じ、さらに第5章『総体としての現代日本——2021年(令和3年)』では、ほんの4ページであるが、スケッチ程度に現代日本の総体について論じたが、以下の本研究ノート第二章では、その延長線上の試みとして、おもに現代日本のいくつかの時事的問題を考察する。

それにあたっては、テキストとして神島が

晩年東京新聞に投稿した6回にわたる寄稿文「転換期を読む」(1994年1月)のうちの3回分を使用し、それに私の現時点でのコメントを註釈という形で述べることにする。項目的に、それは第二章 2-1、2-2、2-3となる。もちろん27年前の神島の投稿は時事的論評であったから、神島がそこで取り上げている具体的事例のほとんどは、すでに「歴史」であるが、それにもかかわらず、神島の視点はそのまま直ちに今日ただ今の社会分析、政治理解に直結するものだと考えるからだ。ここでは神島の各寄稿文を、まずそのまま転記し(イタリック体で示す)、その寄稿文の中で私が論じたいキーワード及びキーセンテンスを寄稿文中に下線とともに註①②等で示し、第二章の各節(2-1、2-2、2-3)のそれぞれの節の末尾に、まとめて註①註②など、それぞれについて私の今日ただ今における考察を行いたいと思う。

第二章 神島二郎「転換期を読む」再考

神島二郎は「転換期を読む」を1994年1月末、6回連載で東京新聞に寄稿した。晩年の一般読者向けの重要な時事的社会的発言であった。1「政府と国民の距離が遠い」2「田中政治の遺産」3「高度情報社会の問題」4「混迷に対処する道」5「行政改革」6「エリートの大衆回帰を」と題された各回、読み切りの短い時事的寄稿文は1、2、3、5は国内政治、社会問題を扱う。4は国際政治の問題であり、6は総括的に神島の政治理論の一端の紹介である。いずれにせよ、各回で神島の鋭い、深々とした状況認識が凝縮されている。

——じつはこの神島の時事的連載寄稿文発表の約10年後、2003年6月に、石積は各回の寄稿文の2003年時点での「今日的妥当性」について、また、その寄稿文で指摘されている問題の、さらにその延長線上で、何が議論されるべきかにつ

いて、今回は触れないが、すでに一度メモを残している。「読書ノート⑥「転換期を読む」を読む」(2010年3月、Project Paper No.21 PP108-119, IIBM 所収)。

1994年の神島の時事的論考は、いったい2021年夏の今でも妥当性を持っているのだろうか？新たに考えてみたい。

なお前述のように今回取り上げるのは神島の寄稿文全6回の中の3回分である。それらは、第一回寄稿文「政府と国民の距離が遠い」(第二章 2-1とする)、第四回寄稿文「混乱に対処する道」(第二章 2-2とする)、第六回寄稿文「エリートの大衆回帰を」(第二章 2-3とする)という項目立てになる。

また石積のコメント中に登場する神島政治元理表98マス目の表現には多くの場合そのターム(用語)のとなりにカッコ付きでアルファベットまたは数字が記されている。これは本稿の末尾に掲載した「政治元理表」における記号と数字の表記と一致する。例えば〈自治〉(F)、「世論」(F-1)というように表記される。これは本稿—はじめに—でふれた本稿の前段となるProject Paper No.54『神島二郎「政治元理表」の世界』と同様な表記である。

2-1 「政府と国民の距離が遠い」

神島の寄稿文

〈1994年1月18日 東京新聞掲載〉転写(全文)

わが国の議会政治はすでに百年以上の歴史をもち、第二次世界大戦後の占領下には民主化が強力に推し進められ、衆人環視のもとに議会・政府は国民にはっきり見える形になった。にもかかわらず、今日ではそれが国民とはほとんど無縁なほど遠い存在になってしまった。はっきり見えるというのは、テレビを通じて時々刻々うるさいほど政府・議会の行動

が逐一報じられているからであるが、人々の思い・人々の願いはどうにもそこには届いていないらしい。どこか、多くは思いもしない形にひん曲げられて実現されるのがオチといったところだからである。

政治腐敗は金丸問題でやっとヤマ場を越えたかと思ったら、ゼネコン汚職の摘発が仙台から始まって茨城に跳び、また仙台へ、というぐあいに性懲りもない有様で、腐敗の根絶こそ刻下の急務と人々は考えたが、政界の動きはそれとはまるで違っていた。

7月総選挙中は腐敗の根絶と政権の交代が訴えられていたが、選挙が終わると、非自民連立政権が新生党小沢一郎代表幹事の主導で、準備不足の日本新党細川代表を担いで、あっという間に腐敗防止と選挙制度改革とを込みにした政治改革^{註①}を課題にでっち上げられた。選挙に先立ってはやばやと自己のレーゾン・デートルを棄てて自分から地盤を縮小した社会党^{註②}はなお連立与党内第一党でありながら、閣僚ポストを得ただけで政策的には抜け殻のようになってしまった。ポーズだけに終始した政治歴があまりに永かったせいであろうか。こんなことは普通ありえないことである。なぜだろうか。^{註③}

私の考えによれば、民主主義は力点のおき所によって三つに分けられる。^{註④}第一は意見の暢達を基礎にした“世論”民主主義、第二は地位の移動を基礎にした“出世”民主主義、第三は直接面接関係を基礎にした“触感”民主主義である。民主主義の理念は自由・平等・友愛といわれるように、民主主義である以上、いずれの側面をも合わせ持っているけれども、それぞれ基調とするところを異にしているからである。

普通西欧先進国の議会制民主主義は世

論民主主義である。明治以来日本はこの制度を導入してきたはずであるが、その定着の過程でいちじるしく出世民主主義に傾斜し変質した。第二次大戦後、日本は占領下に民主主義導入の仕切り直しをした。^{註⑤}ところが半世紀経つとまたもと同じように変質した。蛙の子は蛙というように。

戦前、出世の王道は官僚コースで、議会コースはバイパスに過ぎなかった。戦後は議会コースを中心にすべての出世コースが吸収統合され、しかも大事なことはその頂点に〈隠れた「お上」集団〉が形成されたことだ。「お上」集団の形成には天皇が利用されている。叙勲とか、天皇主催の宴会や園遊会、地方ご旅行の送迎とか、厚薄いろいろだが、要するにそのさいの処遇がランク付けに利用されて一般的基準ができあがっている。この点は戦前と変わらない。

かつては政・官・財はきつね拳のように、三者それぞれ強みと弱みがあり、そのために結びついてきたが、今日ではそれらが一体化して〈隠れた「お上」集団〉をつくり、身分的に世襲化・恒常化が図られつつある。かれらの多くは下々の出身だが、出世の過程で一段上るごとに身も心も変身していつしか驕れる異物となり、下々を見下してはばかりぬ存在になっている。下からは見えないが鋭い階級分化^{註⑥}である。下々の人がいかに歯ぎしりしようと、どうしようもない存在になっている。それが「政・官・業」複合体^{註⑦}である。

しかしながら、議会政治のもとでは、「選挙で当選すれば議員だが、落選すれば只の人」といわれるように、政治家は〈隠れた「お上」集団〉のど真ん中に居ながら、選挙の洗礼を受けなければならない。下々の人がかれらの正体を見破り、政治責任を問い、選挙で落とすことを忘

れさえしなければ、弊害の除去は可能である。もちろん悲観することはないのである。

2-1 註

① 私（石積）は、この制度の導入には、その立法府での採決があまりに政局的な、ドタバタの中で強引に成し遂げられたこともあり（その中で戦後リベラルを担ってきたと自負する社会党は、消滅の道に大きく踏み出した）必ずしも賛成でなかったが、さて、これからどうなるか。「最終的評価はじつはまだわからない」というのが、2021年夏の段階での私の見方である。

しかしひとつだけわかっていることがある。それは「制度はやはり一人歩きする」ということだ。例えば制度導入の主導者である小沢にしても、彼の本当に純粋な願い——彼が純粋に日本の民主主義のためには政権交代可能な仕組みが必要で、そのための制度改革が必要だと考えていたことを、私（石積）は直接小沢と話す中で強く感じていたし、小沢のその後の一貫した行動を見ても、そのことは間違いないと思う——にもかかわらずその方向には日本政治はなかなか動かない。〈理念・思想〉——〈政治・政局〉——〈制度〉の関係でいえば、やはりたえざる理念・思想の進化と幅広い共有がもっとも肝要ということだろう。国民一般の民主主義の成熟度、その背景にある〈政治文化〉こそが決め手になるという、当たり前といえば当たりの事実に立ち返らざるを得ないこれまでの数十年間であった。

② 社会党はその後（1996年）、社会民主党と政党名を変え、2021年時点では政党支持率1%以下の、体たらく、になってしまった。本来、社会民主主義政党は現下の日本の社会状況の中では、勢力伸長の大きな可能性を持っていると思われるが、旧社会党

時代からの遺産をすっかり食い尽くしてしまったのが現実である。昨年の米大統領選挙でのバーニー・サンダース旋風を見ても、社会党がいかに潜在的可能性をみすみす捨て去ったかということがわかる。

- ③ 長年、社会党のサポーター役の一人だったと思われる神島は、東京新聞1996年3月、(上)・(中)・(下)の3回に分けて「社会党は幻だった」という論考を寄稿した。

神島は(上)「虚実逆転の党」では、社会党の候補者が自らの得票行動でなく労働組合の機関決定に依存してきたことの構造的な問題が論じられ、選挙が一般の人々の投票行動としてではなく、組合からの得票行動として成り立ってきたことが問題だと指摘する。(中)「変幻自在の由来」では、社会党は自らの理想を鍛えるというよりは「悔恨共同体」(丸山眞男)的空氣にたより、55年体制の中でその存在にあぐらをかくてきたのであって、状況追隨的である以上、衰退はじつは長年に渡り準備されてきていたのであると論じる。(下)「主役はやはり国民だ」では、政権を取ったつもりの社会党の、今後の急激な衰退と次の選挙における雲散霧消を予言し(実際その予言は見事に的中したが)政治的主体を得票する側でなく投票する側にギアチェンジすることに日本の未来が、そしていわゆる革新勢力の未来があると論じた。

この点では2001年に長野県知事に当選し、次々に投票する側の民主主義の政治行動(ガラス張り知事室、記者クラブの廃止、車座集会)をおこしていた田中康夫の行動に関して、筆者(石積)がその評価を神島に尋ねた際に、きわめて肯定的であったことを思い起こす。

田中康夫は、今年の夏、2021年8月、横浜市長選挙に出馬した。選挙は国政政局がらみ——菅首相のお膝下——でもあり全国的に大きな注目を集めたが、田中康夫のそ

の選挙戦の中での立候補者としての運動も、得票する側の選挙でなく、投票する側の選挙に徹底していたことは注目に値する。もちろん、この場合の投票行動は利権・利益の分け前を求めてのそれではなかっただろう。政治元理表的には、やはり〈自治〉(F)の元理におおきく軸足を置いた田中の選挙戦での行動であったといえよう。

また、いったん市長候補に名乗りをあげ、公示直前に立候補を取り下げた元地検特捜部検事、弁護士の郷原信郎の行動は徹底的に〈法〉(G)の元理に殉じようとするものだったが、自然の成り行きとして田中の政治行動(〈自治〉(F)の元理)をアシストすることになったのは必然であった。政治元理表でいう自治元理(最終権力は「世論」(F-1)であり、その社会の価値は「自由・平等・博愛」(F-7)である)と法元理(最終権力は「法」(G-1)であり、その社会の価値は「公正」(G-7))の親和性である。

- ④ この点については、筆者(石積)は折に触れ、「近代化の三類型」と題して、神島の議論に加え、さらに英・米・日の具体例を挙げつつ論じてきた。(例：付属的論文(その1)/日本の近代化プロセスと政党政治の危機—その一考察、『地方の時代、政党に未来はあるか』2004年Project Paper No.10 IIBM PP31-39)。

しかし神島の議論にも、そして私の議論でも、やや欠落しているものがある。それはいわゆる第三世界からの視点である。例えば、米国が今(2021年夏)完全撤退に動いているアフガンの民主主義の今後をどのように見通すのか、これは「近代化の三類型」、民主主義の3つのパターン論議では不十分だ。これは難問である。

もちろんここでいう難問とは、当面の政治情勢の見通しのことではない。アフガンにおける社会統営の、つまり政治元理の発掘と組み合わせのことである。

私は、自らの国連勤務での二年間に渡るカリブ海の島々での生活や、ニューヨークからの中・長期の出張で何回か滞在した東アフリカの国々、その他、世界各地訪問の経験を踏まえ、森羅万象の政治現象を扱おうとする神島の元理表の普遍性を感じるのだが、この、例えばアフガンの政治を見る際に、どこまでこの元理表が有効であるか、なかなか見えてこない。そこは考えどころだと思う。つまり宗教の問題をどう扱うかである。

元理表で宗教はどう扱うことが可能なのだろうか？

政治は社会の統営、つまり人々のマトメと運営にかかわるものだから、そこに宗教も重要な要素として登場する。これをどう扱うかということになる。

もちろん元理表には、宗教の問題を考える際のヒントがちりばめられていることは解る。例えば元理表の「範疇」の最下段「基底」(10)の問題と宗教は直結する。宗教にからむ政治事象を意識しながら元理表の中の「支配の元理」(J)と「闘争の元理」(I)、その中の各「範疇」を見れば、そこには現状の理解を深めるヒントがちりばめられているだろう。「帰嚮の元理」(A)の中に、宗教的寛容性を見ることも可能である。当然ながら「エロスの元理」(B)は、ほぼあらゆる宗教の共通項ともいえる。じっさい神島も、ここでは詳述しないが、『政治の世界』VI「近代化と政治的〈まとめ〉の原理」で相当程度、宗教の問題に触れている。(『政治の世界』朝日選書1977 PP212-228)。しかし、そもそも元理表がTable of Political Elementsと表記されているように、分析的であることには違いない。宗教は分析的態度と親和性を持ちうるかという難問が横たわる。

それと、もうひとつ、パンデミックの問題もある。つまり医学・自然科学と政治の問題である。社会を人間社会に限定するこ

とができず自然界も含めたものとして考えるとき——もちろんそうしなければ森羅万象をすくい上げることはならないが——さて、この元理表はどこまで有効なのか、あるいはこの元理表をどのように使った場合に、この難問にアタックすることができるのだろうか。この点は課題だ。

⑤ 私は1950年生まれである。つまり、今までほとんど意識しなかったが、日本がまだ米国の占領下であったときに生まれたというわけである。自分自身の小学校時代(新潟県長岡市)、でまだ鮮明に記憶しているのが、いわゆる米国流民主主義の洗礼である。田舎?の教師までもが、そこに希望を抱き、生徒とともに民主主義の実験に乗り出していたことは明らかだった。そして生徒もまたそれを心地良く感じていたことも明らかだった。小学校のその時代から中学・高校に進むにつれて、(すべて公立だが)、どんどんとその民主主義の息吹が失せていったのを記憶する。この点については、本稿第二章 2-3 註④でも論じる。

⑥ 鋭い階級分化は2021年の現在、1994年と比べてさらに進捗している。それを示す社会統計にはことかかない。

⑦ 筆者(石積)は2002年に衆議院補欠選挙に新潟5区無所属(民主・社民・自由推薦)で出馬した。その時のスローガンは「政権交代」「政・官・業 癒着構造の打破」。2021年の現在、政・官・業・癒着はもはや政・官・業・報・学のペンタゴン癒着構造に取って代わられてしまったというわけである。この構造について筆者が学生などに説明するときに使うチャートを図1に掲載する。

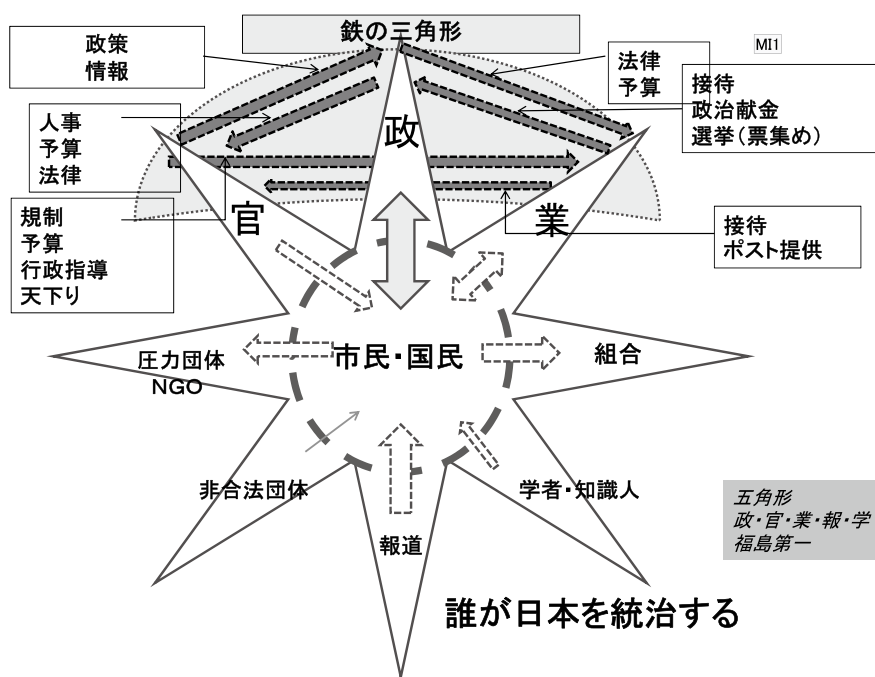


図1 『Discussion Materials for “International Politics” and/or “Area Studies-Japan”』
PP85/86 Project Paper No.45 2019 IIBM 石積勝作成

2-2 「混迷に対処する道」

神島の寄稿文

〈1994年1月2日 東京新聞掲載〉 転写(全文)

世界は過渡期で、目に見える激動と目に見えない潜流が、動いていることだけはだれにも分かるが、そのありようがさだかでない。そのような状況に対処するにはどうしたら良いか。主体の自己認識、これである。外的状況がどうあろうと、これに立ち向かう主体それ自身の姿勢がまず問題だからである。状況についての的確な情報がいかに豊富であっても、主体の自己認識がなければどうにもならない。註①

今日、日本および日本人の自己認識にとって重要なのは、第二次大戦の敗戦をどう受けとめるのかということである。第二次大戦は、日本が始めた満州事変から大東亜戦争まで、その最後を重ね合わ

せて日本の敗北に終わる戦争である。その受けとめ方はその後の歴史的諸段階へのすべての対応にかかわる。それだけではなく、ほかならぬ今日只今、未来に向けての態度決定をも左右するものである。

第二次大戦の終結は、本来なら、その帰結として近代国家形成以来の「力の論理」そのものが問われる可能性をはらんでいた。そしてその可能性が切り拓かれやすかったのは、いわゆる「総力戦」に国民の肝腦をあげ、血涙を絞り尽くして敗れた敗戦国民であり、まさにこの「力の論理」に従って勝利を得、凱旋を花吹雪で祝った戦勝国民ではなかった註②ことは、歴史のアイロニーである。

戦勝連合国は、戦後、国連註③をつくり世界平和と安全保障を求めたが、これもまた「力の論理」に従っていたのである。もちろんそれなりの成果を収めたと

はいえないことはないけれども、それはむしろ冷戦のお陰で、そのためソ連は経済と財政の逼迫、結局はペレストロイカを余儀なくされ、冷戦の終焉、ソ連と東欧の崩壊、そして全地球的な大変動となった。

これに先立ちアメリカもアジアでベトナム戦争にかかわって敗北し、近代以来の国家が拠って立つ「力の論理」にかけりを経験し、経済的にはかつての戦勝国も日独に後れを取った。こうして敗戦と衰退を経験することで、ようやく戦勝国も敗戦国と同一線上に並ぶことになった。正直に言って、これが大きな歴史の流れのあらましである。

日本は敗戦の結果、日本国憲法を得、第9条の制約が経済の高度成長を可能にした。しかしながら、1955年以来、自民党が半永久政権を保持し、一貫して軍事力の増強が図られ、目標は「普通の国家」におかれ、国家の拠って立つ基盤は依然として「力の論理」であった。

昨年8月、38年ぶりに非自民、細川政権が成立し、やっとあの戦争を侵略と認め、軍縮に向かうかのように見える。しかし陰の実力者はあいかわらず「普通の国家」を目ざしており、政権の行方は不透明で、これに対するアジア諸国の危惧は深い。

侵略戦争だったと認めることは、この戦争で死んだ同胞はすべてムダ死にだったと知ることである。戦死も餓死も、すべてムダ死にである。盛大な慰霊祭などは生き残ったものの慰めにすぎない。侵略戦争で死んだということは、真に死者の立場に立つなら、魂を切り刻む痛恨、それ以外のなにものでもない。生き残った者にとって必要なのはこの痛恨を忘れないこと、その気持ちを同胞の死にだけでなく、戦争で犠牲になったすべての死者に及ぼすこと、なかならず侵略された

国々の犠牲者に。さらにすすんで「力の論理」に依存せざるを得ない近代の国家原理そのものを否定し超克すること、それが自己認識の原点である。

かつての連合国の人々が今なお「力の論理」にかかずらい、これを棄てかねているのに対して、この国の「お上」集団はなおその線にこだわり、かれらのいう「国際化」は「力の論理」に基礎をおく国際協力に止まっている。その中で旧式の国家原理そのものを超えようとする動きがいま市民の中に「憲法9条を世界に広げよう」という運動^{註④}として始まりつつある。そこに新しい希望がある。

2-2 註

① 「主体の自己認識」——これこそが今日ただ今の日本にとっての、そして日本人にとってのキーワードだろう。これなくしては、なにも始まらない。その通り。

「主体の自己認識」はidentityということだが、この英語では日本人にはファジーすぎてもうひとつ切迫感が生まれにくい。失われた30年を反転させることができるかどうかは、このキーワード「主体の自己認識」という言葉が、日本人に、そして日本社会に、ついに定着するかどうかにかかっている、といっても過言ではないのではないか。目の前に並ぶ政策選択以前に、歴史的体験を踏まえた我々の立ち位置は何であり、何を目指そうとしているのか、その議論とコンセンサスがとにかく欠落している。漂流する日本だ。

いわゆる教育機関という場でも、これが欠落している。もちろん私が言いたいことはいわゆる「愛国教育」を復活せよということではない。むしろ真逆なのだが、それにしても「私はなに?」「私たちはどこへ?」という話が日常にならないとまずい。

② 私たちは敗戦という〈資産〉を活かし

切ってきただろうか？敗戦後、高度経済成長があったが、その高度経済成長の最中に、次なる経済の、そして国家の方向性と戦略を構想できなかった。それが今日の低迷になっている。敗戦があったからこそ、それを政治的・思想的資産として、独特の国際政治での立ち位置を求めて、他者を説得し他者から認知され、逆に良い意味でのリーダーシップを取ることは本当に不可能だったのだろうか？日本社会では元理表というところの「支配元理」(J) から最も遠いところで社会の統営がなされてきたという歴史的経験、つまり「おてやわらかなマトメ」——神島は元理表の中の「帰嚮元理」(A)、「エロス元理」(B) を〈おてやわらかなマトメ〉の原理とし、「同化」(D)「自治」(F) を〈てぬるいマトメ〉、「支配」(J)・「闘争」(I) を〈てあらいマトメ〉と区分けしている。「帰嚮元理」(A) は日本社会と大きな親和性を持つが、その伝統的な〈おてやわらかなマトメ〉——の感性と技術はこれからの国際社会の中で、逆に〈資産〉となりうるのではないかというのが、神島の、そして私の議論である。

- ③ 国連は基本的に20世紀の政治思想の中で生まれ、現在もその線で動いているが、敗戦日本は、じつは20世紀、つまり現在の国連の思想を乗り越える契機を孕んでいた。それが憲法第9条に象徴されている。戦後日本は「平和・金儲け」のスローガンでやってきて、それはそれなりの成功体験をもたらしてきた。しかしもう一步深く平和のスローガンを内面化し、その線で国際政治の中で行動する中で、じつは大きな可能性を開拓することができるかもしれない。

国連と日本の平和憲法、特に第9条の関係について、私は「3つの戦争を再考する—湾岸・アフガン・イラク戦争と日本—」という45ページに渡る論文で自分自身の

考えを論じている。また柄谷行人は同じような問題意識で『憲法の無意識』『世界共和国へ』等で論じている。

参考文献：石積勝「3つの戦争を再考する—湾岸・アフガン・イラク戦争と日本—」『国際経営フォーラム』No.19/2008
IIBM PP127-161。

- ④ こうした運動には筆者も何年かにわたりかかわってきた。例えば「世界社会フォーラムに参加して——憲法9条問題のブレークスルーへ——」論壇時評・『神奈川大学評論』PP127-133その他の発表文がある。またICAN International Campaign to Abolish Nuclear Weaponsという、その代表をカナダ在住の被爆者日本女性がつとめる反核運動団体は2017年にノーベル平和賞に輝いたが、その一歩先に行くはずの憲法第9条の世界的認知の問題は先がまだ見えない。

2-3 エリートの大衆回帰を

神島の寄稿文

〈1994年1月27日 東京新聞掲載〉転写(全文)

冷戦の終結後、国民国家の“亡霊”がさまよっている。それは民族と「力の論理」である。民族は国民と同じくネーションの訳語だ。それは近代の国民国家の形成とともに出てきたもので、既成の国家の枠を超え、内外にそれとずれて政治統一を求めるようになる。民族はいずれにせよ同化・同質の純粹化志向をもち、フォークロアのフォークに当てられる日本語は常民で、異質・雑多の共存志向を持つ。

このように考えると、常民は小さなまとまりから人類にいたる緩いまとまりで、民族は近代以後の固い統合を求めた国民である。それらに対応する政治はお

のずから多様で硬軟さまざま。期待できるのは民族よりも常民ではないかと私は思う。

政治は人を動かす手段の体系だといわれるが、人を動かす手段たりうる基礎的な事実の論理、それを〈元理〉と呼ぶならば、いくつかの〈元理〉を組み合わせでシステムができ、具体的な政治体が形成される。その場合、元理の組み合わせはさまざまであり、固定したシステムはない。たえず入れ替わり、変化している。そのように考えると政治の現実がはじめて理論的に捉えられる。

基礎的な元理は少なくとも6つある。註① 闘争、支配、自治、カルマ（業）、および帰嚮である。いずれのシステムも元理の組み合わせに力点のおき所が違い、当該政治社会で力点がおかれた元理は認識しやすい。

政治は人を動かすことだから、そこでは、動かす側と動かされる側とに分かれる。それが「お上・下々」の上下関係である。その分かれ方は固定的から非固定的まで、きつくも緩くもありうる。それに応じて、手段も違えば元理も違う。歴史的には固定から非固定へ、厳から暖へ註② 推移する傾向がある。近代国家は人間をも兵器にした暴力組織＝軍隊を基礎にし、暴力・武力を最後の切り札とする支配原理に依拠した。

しかし、暴力の発動は極力回避され、政治学ではそれを「暴力の経済」と呼ぶ。ということは、歴史的には脱支配元理の傾向があること。民主主義は元理的に自治と支配とから成るが、その間には矛盾・対立がある。註③

自治元理にとって重要なのは世論の形成とその行方だ。そのためには、対話、討論、会議の練習が必要だが、明治以後日本はこれを怠った。戦後一時その育成を努めたが、たちまちそれを廃した。註④

議会がまともでないのはそのためであるうか。

人心は帰向元理の最後の切り札になるが、これは世論とは違う。世論は討論過程でつくられるが、人心はいうなれば集合的な感性の流れであって、今日不得要領ながら軽視できない“内閣支持率”は人心に近いかもしれない。註⑤

世論と人心はいずれも下から出てくる点では同じである。人心は耳目に触れる感触を機縁にするから、マスコミ、ことにテレビが役立つ。重要なのは、それにさらされる時間ができるだけ長いことだ。その点でタレントも天皇家も同じ。社会主義国や独裁国の元首が使う肖像戦略もそれだ。過去の経験からそのプラス・マイナスは慎重に検討が必要だろう。

天皇家は議会政治からもっとも離れ、おそらく京都に帰ったほうがよい。逆に政治家は議会政治に真正面から取り組み、安易に天皇を利用しないことである。金権政治は金と脅しの政治だが、脅しを使うのは支配元理で、金を贈るのは同化元理だ。支配元理が退潮にあるのはすでに言及した。同化元理は議会政治からは完全に排除しなければならない。過去イギリスではそうした。選挙制度の改革などはその後にするべきだ。註⑥ さて最後に一言。政治社会にエリートは必要不可欠註⑦ だが、エリートを「お上」入りさせて固定化するのは最悪といえよう。「下々」の中にたえず引き戻さなければならない。そのためには、政治家に二重の定年制（第一は在職20年を限度に、第二は65歳止まりに）を設け、定年後は「只の人」になってもらおう。これは、ひきつづき出世主義社会でありつづけるであろう日本においてはきわめて大事な措置だと私は思う。

2-3 註

- ① 神島は、この寄稿文の段階では、6つの元理を提示していた。その後、神島は検討を重ね、最終的には10の元理を元理表に提示するにいたっている。この辺の変遷については、前掲『神島二郎「政治元理表」の世界』の中で論じた。
- ② 「固定から非固定へ、厳から暖へ」という世界状況は、もちろん紆余曲折がありながら、しかし着実に進展している。これはいわゆるグローバリゼーションのひとつのプラスの側面である。ネットの世界のそれも含めた情報革命の中で、あからさまな19世紀的侵略戦争、すなわち、むき出しの支配元理一辺倒の国家の行動は難しくなっているが、しかしそうした戦争も依然として残る。前掲石積論文「3つの戦争を再考する—湾岸・アフガン・イラク戦争と日本—」ではこの3つの戦争を十把一絡げにせず、それぞれの戦争での主たるアクターの行為の本質を19世紀型・20世紀型・21世紀型と区分けして、検討しようと試みている。
- ③ ただし、いわゆる近代社会、なかんずく西洋近代の中には厳然として「自治の元理」(F)と「支配の元理」(J)の矛盾・対立がある。これは克服されていない。2021年8月アフガン情勢はこの矛盾を再びわれわれの眼前にさらしている。米軍は民主アフガンの醸成のためにタリバンに対峙しているというわけだが、その対峙はもっぱら「支配の元理」(J)の核心である〈軍隊・武力〉(J-1)をもって行っているというわけである。近代西洋政治——その中心に依然としてアメリカがいるが——の「支配元理」(J)による社会統制の限界が多くの人々にも感知されているというのが現実ではないだろうか。米国撤退の後にロシアや中国がアフガンに乗り出してきた場合でも、この限界（もっぱら「支配元理」(J)

で社会統営を行うという限界）は早晚はつきりと目に見える形で現れるだろう。

タリバンやタリバン支持者たちに見えているアメリカ（近代西洋政治）はもっぱら「支配元理」(J)の西洋であるはずだ。この「支配元理」(J)の明らかな限界の中で、「帰嚮元理」(A)や「エロス元理」(B)や「カルマ元理」(C)といった〈おてやわらかな〉マトメの元理を、相対的により多く、その社会の伝統の中で醸成してきた者たち（たとえば日本人）の出番なのではないか。アフガン社会で尊敬を集めていたという日本人医師中村哲氏は、クリスチャンであった。クリスチャンとして「自治の元理」(特に自由・平等・博愛)(F-7)「エロスの元理」(特に愛・和・幸福)(B-1、5、7)、日本人としての「帰嚮の元理」(特によさし・受容・清明)(A-3、5、7)といったそれぞれの光の側面を中村氏は持っていた、また発揮されていたからこそ、彼はアフガンで尊敬を集めていたのだろう。個人として「支配の元理」の相対化をおそらくは現地でもやり続けていたのだろう。

「支配元理」(J)の相対化はじつは日本社会の資産である。神島元理表では「帰嚮元理」(A)の範疇・最下段基底に「馴化強制」(A-10)があるが、これは「支配元理」(J)の基底「異化強制」(J-10)と対極をなす。社会のマトメ方としての〈おてやわらかなマトメ〉が歴史的にも色濃く刻まれている日本社会、日本政治自身が、そのことのプラスの価値を発見し、同時にその国際関係上での劇的な醸成に世界規模で向かう。そこにこそ、新しい日本人のプライドが生まれるのではないか。

- ④ 対話・討論・会議の練習が、たしかに戦後一時期の教室の中で盛んに行われた。文部省はみずから『民主主義』という本を戦後すぐに発行し（復刻版あり）それは全国の中学生・高校生の社会科教科書として使

われた。上・下巻で400ページに渡るこの様々な漫画イラストを挟んだ本は、まさしく、なぜ対話・討論・会議が大事かということの世界の歴史、民主主義の発展の歴史とともに語り、そしてその練習のしかたを示している。この本は1953年まで全国の学校で使われた。私の小学校時代（1957年入学だと思う）でも、まだこの民主主義の教室の息吹ははっきり残っていた。

何年か前にこの本を大学のゼミでみんなで読んだ。学生たちは驚愕していた。なんとあまりに自分たちの社会科の教科書と違うことかと。『民主主義』では次のように述べる。

「政治上の制度としての民主主義ももとよりたいせつであるが、それよりもっとたいせつなのは、民主主義の精神をつかむことである。なぜならば、民主主義の根本は、精神的な態度にほかならないからである。それでは、民主主義の根本精神はなんであろうか、それは、つまり、人間の尊重ということにほかならない。」（『民主主義』径書房、復刻版1995年 PP16）

- ⑤ 2005年小泉郵政選挙に関し、私（石積）は神奈川新聞の2005年9月28日、「文化面」に「小泉劇場選挙を終えて」という、ほぼ1ページ分を使った寄稿文を寄せ、人心（A-1）と世論（F-1）の関係についても触れた。

- ⑥ 小選挙区制の導入は「政治改革」という大きな旗の下で、実際には具体的なふたつの御旗のもとで行われた。第一の旗は、政治と金、政治腐敗打破という御旗だった。政治に、特に選挙にお金がかかりすぎる、それが政治腐敗のもとだから、これをなんとかしなければならぬ、という旗だった。第二の旗は、政権交代可能な二大政党制という旗だった。政権交代可能な仕組みにし

なければ、日本の政治は新しい事態（例えば冷戦崩壊後の世界）に対応できないし、国内政治・社会の、思い切った改革もできない。つまり1955年体制の硬直した「一カ二分の一」体制からも脱却できないから、政党中心の政治を実現しなければならないという旗だった。

この二つの旗を「政治改革」のスローガンとともに同時に掲げて、一挙に日本の政治を動かそうということだったが、この「小選挙区比例代表制」のもとでの国政選挙からすでに25年、もちろん思ったような結果は得られていない。この間の日本政治・日本社会の漂流と衰退は、制度改革以前の政治民度、政治文化の深化にこそ、そのカギがあるのだという現実をわれわれに突きつけている。

- ⑦ 現代日本社会の最大の問題のひとつが、じつはエリートの矜持、ノブレス・オブリージのほぼ全面的な崩壊であるというのが私の見方である。この点についてロンドン大学にいたノーベル経済学賞をつねに噂されていた経済学者、森嶋通夫が『日本はなぜ衰退するか』（2010年 岩波新書）で以下のように述べている。

「——中略——日本の政治家に対する外国の評価は確実に今より悪くなる。今でも日本の政治家を処遇しかねると思っている外国は多いが、そういう評価は公認のものとなるであろう。国の格付けを決める場合に、どんな政治家がいるかは大きい判断材料になるから、日本の格付けは明瞭に低下すると考えなければならない。——中略——高度成長の時は、朝鮮戦争、ベトナム戦争の風が吹いていた。それらの風がなくなれば船のスピードはエンジンだけのものになってしまう。したがって、無風状態の時に船を走らせるには、自

分たちで風を吹かせるか、外部の人に風が吹くようにしてもらうかのいずれかである。日本人の中で、風を吹かせる役のもは政治家である。しかし現在の日本にはそういう役割を果たせる政治家は不在であるし、日本の政治屋連には、風を吹かせるのが自分たちの義務だという意識は全くない。彼らは予算の割り当てで自分の選挙区に分け前を増やすことを自分の天職と心得ているだけだ。——後略——」(第3章「精神の荒廃」PP63, 67)

なお、上記引用文では、森嶋があたかもエリート主義者のような印象を与えるかもしれないが、ここで森嶋が論じているのはエリートの質の問題である。森嶋はそうしたノブレス・オブリージ(上級国民意識とはまったく違う、逆に公的義務感のことを指すのだが)なき現在のエリートは、じつはそれを生み出した高度成長期以降の日本の教育からくる必然であるとする。この同じ第3章の中で、戦後日本の物質主義者・功利主義者育成のための教育を、「教育の荒廃」として論じている。日本のエリート大学の若者は倫理や社会的な義務や、さらに「愛」も知らない、と述べ、それこそがノブレス・オブリージの欠落であり、政治家不在の背景であると論じる。

私たちの研究会(比較日本研究会)でも、何回か森嶋の日本論を取り上げたが、その際に示された神島の森嶋への賛意を思いおこす。要するに世界的経済学者森嶋は、日本におけるダイナミックな自由主義教育の欠落を嘆くが、彼は自治元理(F)の強力な支持者であり、同時に例えば帰嚮元理(A)やエロス元理(B)もおそらくは理解するパトリオット(愛郷者)でもあったと私は思う。この点で森嶋は神島に共振する。

おわりに

私がはじめて神島二郎氏にお会いしたのは、1980年代の初頭のはずである。当時私は国際大学大学院で原田鋼先生の助手として日本政治論のクラスを担当していた。直前まで国連本部勤務だったこともあり、要点急所を英語で説明したり、日本人学生と留学生の間での英語での討論をプロモートすることも私の役割だった。その原田先生が文化功労者に選ばれ、お祝いの会が日本政治学会の主催で行われた。神島先生が日本政治学会理事長としてご挨拶されたあとの祝賀パーティーの席上で、私は自己紹介し、先生の日本論に興味を持っているとお話したと思う。なにせ学会なるものにはこの時(30代半ばだが)まで、まったく無縁で様子も分からず、プロトコル無視で、いきなりそう話をさせてもらった。

驚いたことに、一週間も経ずして神島先生から突然、電話があり、「来週自宅で研究会があるから来てみないか」という誘いだった。どこの馬の骨かも分からぬ、研究歴も全くないような私のような者がお邪魔して良いものだろうかと、一瞬迷ったが、せっかくのお誘いなのだからということで、祖師谷のご自宅にお邪魔し研究会の皆さんにご挨拶した。当然、どこかの大学の先生方中心の研究会なのかと思っていたが、まったく違った。幹事役の岡敬三氏は現役の会社経営者、副幹事役の大森美紀彦氏は東京都の職員、その他もう二人ほどメンバーがいたがいずれも大学の先生というわけでもないという。

その後、毎回参加するようになり、私も含めて上記3名の常連以外の、プラス2名ほどの参加者メンバーは時々入れ替わったが、神島先生はその研究会に意識して実務家・実務経験者を招いておられるようだった。学会や大学というような狭い世界を越えて、現場の現実から生まれる問題意識を重視し、吸収したいと強く思っておられるようだった。

神島政治学の特徴として本稿第一章で〈重

層性〉と〈執念〉について述べたが、もうひとつ〈現場主義〉ということもある。この場合の〈現場〉はもちろん大学や学会の現場という意味ではない。広くビジネス界、役所、NPO、海外、地方、その他諸々の現場である。考えてみれば、その〈現場主義〉は当然なことである。とにかく先生は広く政治社会の現実を丸ごとつかみ取り、それを説明する認識枠組みの再構築を、つまり政治学グランドセオリーの再構築を企図しておられたのだから。そうした〈執念〉と〈現場主義〉の中で生まれた〈重層性〉の結集であるような「政治元理表」を、前田氏のように「具体的接近にあたっての索出原理」として利用させてもらいながら、もうしばらく、日本の、世界の現実についての考察を進めたいと思う。

政治元理表 Table of Political Elements

元理 element 範疇 category	帰嚮 A Involution	エロス B Eros	カルマ C Karma	同化 D Assimilation	互換 E Reciprocity	自治 F Autonomy	法 G Rule of law	知己 H Menschenkenntnis	闘争 I Struggle	支配 J Hegemony
権力 1 Power (gambit)	人心 current mood	愛 love	業 karma	文明 civilization	交換 exchange	世論 public opinion	法 law	出会い encounter as chance	真鋭 mana	武力 armed force
体制 2 Regime (order)	まつろう・しらす pietas & regno	族制 relative system	縁 pratyasamutpada	内外華夷 center & periphery	コムニタス communitas	連合参加 consociation	原告 被告 accuser & accused	二人関係 Zweisamkeit	敵味方 friend & enemy	支配従属 domination & subjugation
制度 3 Institution	よさし trust	家族なり教養 family-Bildung	道理 dharma	教義 doctrine	伝統 tradition	契約 contract	法治国 Rechts-staat	たのみ たのまれる confidence	治 judgment	組織の強制 organization as coercion
運動 4 Activity	もののあわれ Japanese boredom	反抗期 rebellious age harassment	達観 satyagraha	造反 zao fan	革新 innovation	異議 protestation	市民オンブズマン democratic control of public administration	不信 distrust	乱 conflict	抵抗 resistance
指導 5 Leadership	受容 capacity (network)	和 Wahlverwandt scharf	行 yoga	超贈与 potlatch	志 ambition	代表 representation	弁論 legal debate	人間洞察 insight into personality	カリスマ charisma	統率 capability (commandership)
変動 6 Change	なる becoming	一家離脱 broken up family into singles	輪廻 panta rhei	情報革新 information revolution	世直し restoration	俱分進化 dualistic evolution	政治の透明化 turn to a transparent politics	祝祭 festival(orgie)	興亡 rise & fall	暴力革命 violent revolution
価値 7 Value	清明 serenite (innocency)	幸福 happiness	平安 santi	豊かさ affluence	共生 millet (milla)	自由・平等・友愛 liberty/equality / fraternity	公正 fairness	信義 faith	いのち life (human rights)	正義 justice
責任 8 Responsibility	懺悔・自決 confession/ suicide	謝罪 apology	諦観 resignation	私財傷尽 public service	自戒 self-discipline	相互決定 mutual decision	成敗 judgement	慎独 self- carefulness	人民裁判 people's court	戦争裁判 war tribunal
財源 9 Finance	奉納 offer to deity	共食 communion	布施 offering	貢物 tribute	異人歓待 hospitality	課税 approved taxation	自弁 pay one's own expense	提供 presentation		
基底 10 Base	馴化強制 convergent constraint	家族強制 family constraint	無化強制 de-imaging constraint	無為強制 inactive constraint	無辺強制 borderless constraint	遍路旅宿強制 hijra (mobility) constraint	情報公開強制 information- disclosure constraint	青春体験強制 youth experience constraint	物化強制 reificative constraint	異化強制 matsyanyaya constraint

出典：『回想神鳥二郎』PP. 43-44 元理欄（横軸）各項目のアルファベット表記、範疇欄（縦軸）各項目の数字表記（追加）は石積による。